

甲
卷

終戦の年の春「招集」にあつて鳥取に入隊。鳥取砂丘で連日猛訓練。中国進撃は沖縄戦敗北でつぶれ、六月のはじめに行き先も知られないまま「広島」へ転属になった。広島城の下で馬と暮らす「輜重兵」部隊。

そのころ既に毎晩艦載機の襲撃があり、私は眼はわるくても聴力がよかつたせいか兵舎の矢根の上の監視哨で「敵機来襲」の監視に当たっていた。酒舗（売店）には既に食べ物は全くなかった。昼は専ら河川敷に設けた軍馬用の防空壕へ馬を避難さすのがそれが日課であった。そのまま広島におれば、当然原爆に晒されたはずだったが、私は「幹部候補生」の教育があつて広島近郊の「八本松」に移り短期間その教育訓練を受けた。なにしろ全てが応急措置でこの訓練も全くお座なり。それがすむと所属隊から離れて四国へ渡ることになつた。アメリカの上陸を高知湾の水際で迎え撃つ作戦であった。

七月の一 日、宇部から連絡船で四国に渡った。途中「岡山」は空襲で燃えていた。「高松」に夜中に着いて駅前旅館で仮睡したが、ここにも早朝爆撃があり何人かの死者が出た。その高松から四国山地の「天坪村」まで、鉄道は空襲で寸断されていたので深い谷底の道を徒步で行つた。中国山地を裏側から高知県に登つたのであろう。何日目かにその「天坪村」（後ここは「繁藤村」）にたどり着いた。ここは高知への物資輸送の根拠地になつていて、食料や弾薬の貯蔵庫が数しづれ掘られていた。

到着したその日から。そこから高知市への輸送戦略が始まった。高知の町まで何キロあたのだろう。毎夜馬を曳いての夜間輸送行軍であつた。当時すでに食料も兵士の装備も枯

渴していたので、夜一杯行軍して帰りつくと「草鞋つくり」の使役と「蛇取り」（當時海は近いのに蛋白原がなく黒蛇でそれを捕つたの使役が待っていた。また、弾薬庫造営のための山林伐採作業にも駆り出された。この作業中にも沢山の犠牲者がいた。その一人M君の死は、六十年たった今でも思い出す痛恨事

山の急斜面を猛スピードで走り降りるトロコから積んだ材木もろともに振り飛ばされてトロコの車輪にまき巻き込まれたのです。当事二十一歳であつたM君は片腕切断の重症を負い、谷あいの小学校の一室の「臨時野戦病室」に運ばれた。敗戦の年の八月六日の夕

幸い最後まで付き添うことのできた私に、「手を離さないでくれ」「こわい、寒い」

が応急措置でこの訓練も全くお座なり。それがすむと所属隊から離れて四国へ渡ることになつた。アメリカの上陸を高知湾の水際で迎え撃て作戦であつた。

松」に夜中に着いて駅前旅館で仮睡したが、ここにも早朝爆撃があり何人かの死者が出た。その高松から四国山地の「天坪村」まで、鉄道は空襲で寸断されていたので深い谷底の道を徒步で行つた。中国山地を裏側から高知県に登つたのであろう。何日目かにその「天坪村」（後ここは「繁藤村」）にたどり着いた。ここは高知への物資輸送の根拠地になつていて、食料や弾薬の貯蔵庫が数しれず掘られていていた。

すると彼は「ああ、俺のうちも帰命無量や」「帰命無量寿如来ってどういうことなんや。なんちゅうことなんや」と問い合わせてくるのです。

答えない訳にもいきません。おそらく、し
どろもどろに次のように言つたのでしょうか。
「南無阿弥陀仏」というお念佛のおいわが
〈帰命無量寿如来〉や。二十年・三十年のち
抜けないのちではなくて、量り知れない大き

出石組
親鸞聖人 750回大遠忌法要

来る9月25日（日）に出石のひぼこホールにおきまして、親鸞聖人の750回大遠忌法要が厳修されます。

出石組18ヶ寺から400人以上が結集しての大法要となります。勝林寺では高齢のご夫婦を中心に30の方々をご招待いたしました。

また、若院家がこの度中型免許を取得し、マイクロバスで皆様の送迎をさせていただきます

M君は、驚くほど素直に歎びを表情に表しました。

「そうか、そうやったんか。そなら、南無阿弥陀仏いうたら、おれんちの爺ちゃんとかあちゃんともあえるのやなー。そうか、そうやつたんか。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀お念佛を、いかにも嬉しそうに、懐かしさうに唱えて、そして、その声が消え入るようになってしまったとき八月八日の東の空がしらじりと明けはじめました。

「仏教傳入の初期
既に現にいたるの外も確證の
神妙な面持たて參照したわいへたひ十日也。
諸宗な本もで仏様と回れひ江。
御城は既ひだる御園はむなれひ」と、態度。
一概)ハシナタマヘ。」
「などシヤフタターハ。」
御城が走れるむかづきはいたるひあると解。」
奇想天外な品々が
流れりへるわ、流れりへるわ。

